

■活動レポート

よみがえる登録有形民俗文化財「陸前高田の漁撈用具」

学芸調査員 目時和哉（民俗部門）

陸前高田市立博物館収蔵資料のレスキュー活動に関しては、すでに本紙上でも数次にわたってとりあげてきました。

今回は同館が所蔵する国の登録有形民俗文化財である「陸前高田の漁撈用具」に焦点をあて、被災した民俗資料の再生までの道のりの一端をご紹介します。

まず当資料がいかなるものかについて、文化庁ホームページにおける解説を以下に引用します。

「この資料は、三陸海岸南部に位置する陸前高田の広田半島とその周辺地域で使用されてきた漁撈用具の収集である。広田半島は、入江や岩礁が点在する典型的なリアス式海岸であり、地先の磯漁や釣漁、海苔養殖、沖合での網漁や釣漁などが行われてきた。本件は、磯物採取用具、陥穽用具、突漁用具、釣漁用具、網漁用具、製造加工・養殖用具、舟関係用具、運搬用具、仕事着、儀礼用具に分類され、この地域の漁撈用具をほぼ網羅する。」

紙幅の都合上、詳細についてはやはり同ホームページに委ねますが、三陸地方における近代漁業の技術・方法と、その伝播過程等について体系的に知り得る貴重な資料群です。

被災直後の市立博物館の様子については、すでにバックナンバーで紹介されているとおりであり、あらゆる資料が渾然一体となったまま運び出され、そのまま同市内陸部にある廃校の教室に山積みされました。

二千余点を数える登録文化財群は、5mを超えるさつば舟（小型の木造船）から、1cmに満たないほどの小さな釣針まで、形状・材質ともにバラエティに富む資料から構成されています。そのため他の資料と登録文化財資料を選別するところからその救出作業は始まりました。

幸い資料の大部分には、防水性のあるタグが、津波を受けてもなお付随しており、そこに記されたIDと、残されていた登録文化財の一覧表を照合することで、より分けることが可能になります。

一点一点資料本体とタグの写真を撮り、それをもとに残存が確認された資料をリストアップしていきます。九月末時点で、2045点中、1730点の現存が確認されました。このほかタグが失われているものや、破損して一部のみ残存している資料などの同定が今後進むことで、全体の9割ほどは回復できると見込んでいます。



国の救援委員会のチームによる一次洗浄

その後の工程は他の民俗資料と同様に進められますが、ハケやブラシを用いて表面に付着した砂埃を落とす一次洗浄を経て、専用の薬剤による本格的な殺菌洗浄から、資料の材質によっては水漬けによる脱塩までを施していきます。

最終的に、資料の酸化・虫害を防ぐために、空気を透過させないフィルムに、脱酸素剤とともに封入することで、長期間の安定保存が可能になります。

現在そこまで処理が進んだ資料はほんの一部ではありますが、それでもスチール棚に収納された資料を見るにつけ、市立博物館で瓦礫を運んでいた4月当初以来積み重ねてきた半年という時間の経過と、陸前高田市の文化財が着実に再生へ

向け歩んでいることを実感します。

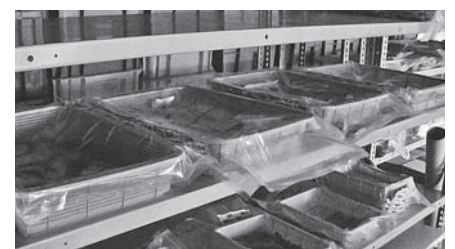
そこに至るまでの道程はもちろん岩手県立博物館の独力で達し得たものではありません。連日決して十分とはいえない環境下で作業を続けている陸前高田市の方々に加え、公私を問わず全国から応援に駆けつけて下さる学芸員・大学関係の皆様、数えきれないほど多くの人々の手によって、陸前高田の漁撈用具は震災以前の姿を取り戻しつつあります。



奈良から当館までボランティア作業に駆けつけて下さった方による漁具の殺菌洗浄の様子

ひとつの釣針に限って言えば、それほど大きな価値は認められないのかもしれませんが、それが集合体となることによって、単なる総和以上の価値が見出されていく。登録文化財修復の過程は、どこかそういった資料の在り方そのものにも重なります。

同じように、一学芸員にできることは微々たるものではありませんが、それでも目の前の一つの資料を救うことが、ひいては本県における震災復興、その全体へと連なることを祈りつつ、陸前高田市に通っています。



一連の作業を終え、復興後の未来へと託される文化財